

わがこと 表現とオノマトペ

今の私 だけの感覚と表現

三浦俊介

1 問題の所在

日本語には、行為・状態・情意の主体を言わない表現がある。例えば「ばりばり仕事がしたい」「むちゃくちゃ寒い」「大好きよ」「どうもびんと来ないな」などがそれに当たる。これらの表現は、何かを感じて発話する主体である 私 の感覚や状態しか表明できない わがこと 表現である。 わがこと 表現とは具体的にはどのような表現か。

本稿は、日本語独自と言ってよい わがこと 表現の実態を分析し、特殊な動詞や形容詞と格助詞との対応について考察するものである。最終的には、限りなく主観的な質感を表す「クオリア」という新概念を導入して、オノマトペ（擬声語・擬態語）の独創性についても言及してみたい。

2 日本語文の省略

日本語文では、主語や述語、時には文のほとんど全てが省略されることがある。A～D四人の会話を例示する。

(1) A「今年のプロ野球はどこが優勝するだろうか。」

B「阪神。」

C「でしよっね。」

D「まさか。」

Aの問いに対して、Bは「今年のプロ野球は」や「優勝するだろう」を言わずに、話題の焦点であるチーム名だけを挙げて確信的に自説を披露している。次いで、CがBの答えを承けて「でしよっね」とモダリティ（話し手の判断や聞き手への配慮を示す部分）の表現だけを言って同調し、最後にDは、B・C二人の判断に対して、呼応の副詞「まさか」だけで反論している。Bの文には述部がなく、Cではモダリティ以外の部分が省略されており、Dに至っては副詞しか使われていない。文法的には破格のようであるが、現代日本社会において、このような会話は何の支障もなく、ごく自然に、無数に取り交わされている。日本語では、どうしてこのような省略が可能なのであろうか。

日本語では、話者と聞き手との間で共通理解している話題や表現を省略しても、新しい情報だけを伝えればコミュニケーションが成立する。話し相手の立場や教養、話題や付帯情報などのコンテクストに依存して共有している話題についての重複を避けることができる。会話の時間や労力の無駄をなくせる点で、日本語は非常に経済的な言語と言える。著しい省略がなされていても、前掲のA～Dの文意は明白である。BはAの問いに対する答えとしてチーム名のみを言い、CはBと同意見だが、Bのような「断定」を避けて「推量」とした。モダリティだけで事足りた。DはB・Cの見解に対して不同意を伝えるだけでよかった。副詞で充

分だった。はっきりと異見を述べる必要があれば、Dは例えば「星野監督がやめた以上、まさか阪神が二年連続で優勝したりはしないでしょ。今年こそ巨人の優勝ですよ。」と言ったはずである。

日本語に特徴的な省略表現とされる「うなぎ文」も、実際に用いられる会話の文脈の中では、決して文意の定まらぬ「未熟文」ではない。食堂で「私はうなぎ」と言えば、話者が「鰻重」か「鰻丼」を注文したに決まっている。「あなたの好きな魚は」「あなたの嫌いな魚は」「あなたのニックネームは」などという問いに対して、そのいずれにも「私はうなぎ」と答えることができ、その答えに揺れはない。さらに言えば、質問者と向き合っているのが話者一人だけなのであれば、「私は」ということさえも言う必要がなく、単に「うなぎ」と答えるだけでよい。質問者に答えがわかれば、それで対話が成立するからである。

日本語にはこのようなコンテキスト依存型の省略表現がある。しかし、日本語にはコンテキストとは無関係に、本質的に主語を言う必要のない表現がある。

3 わがこと 表現

日本語には、話者の感覚・感情などの心的状態しか表現できない特別な表現がある。渡辺実は、「話手」「私」のことを述べることは出来ても、他人「彼」のことを述べることの出来ない語の存在は、周知のことであろうが、それを本稿では「わがこと」「性の語」と呼ぼうとするのである^①と定義して、以下のような事例を挙げている。通し番号は便宜的に三浦が付けたものである。*印を付けた例文は非文である。

(2) a 私は うれしい(悲しい/楽しい……)

b *彼は うれしい(悲しい/楽しい……)

(3) a *私は うれしそうだ

b 彼は うれしそうだ

用例2aでは「私」が「うれしい」の感情の主体である。2b「彼はうれしい」は日本語文として成立しない。「うれしい/悲しい/たのしい」などの感情をあらわす形容詞の主体には、基本的には話し手の「私」しか立たない。渡辺が指摘した「わがこと」「性の語」による表現は、「私は水が飲みたい」や「私は水が欲しい」「私(に)は水が要る」などにも当てはまる。本稿では、「わがこと」「性の語」による特別な表現を「わがこと 表現」と総称しておく。

逆に「彼」が主体の時には3b「彼はうれしそうだ」が適格であり、3a「私はうれしそうだ」は成立しない。話し手・書き手は、第三者「彼」の心情を「うれしい」という わがこと 表現で述べることはできない。そこで、第三者の心情を表現するために、日本語では「〜そうだ」という表現が使われる。「彼はうれしそうだ」以外にも、「彼はうれいだろう/らしい」という推量の表現や、「彼はうれしがっている」という動詞を使った表現を使うことができる。渡辺は、話し手が自分自身のことを言う場合には使えない「そうだ」を「ひとごと」「性の助動詞」と名付けている。

川端善明は、「情意性述語」としての形容詞と「我」との関係について、次のように論じている。^②

述定述語としての形容詞は本来活用をもたない。終止形としての「……し(文語)」「……い(口語)」が唯一の活用形である。それは形容詞の本質規定にとつて重要な事実であろう。(中略)情意性述語には、情意の主体が常に一人称「我」として意味的に潜んでいる。時に主語として文に現象し、時に対象としての主語と併存することもあるが、本来、いかにも三人称的ならざる「我」なのである。

川端は形容詞には活用がないと言い、「情意性述語」には「我」が潜んでいると言う。「情意性述語」の一つとしての形容詞は、ほかの誰でもない話し手（以下 私 と表記する）の、感じて発話する時点である「たった今」（以下 今 と表記する）の感覚（痛い・熱い・つらい等）や心情（恋しい・哀しい・気持ちいい等）を表現する言葉である。感動詞的な情意の形容詞には現在形がなく、私 以外の心を表現することはできない。川端のいう「情意性述語」は、渡辺のいう「わがこと 性の語」の同義語である。

川端は「情意の主体」、つまり 私 が「時に主語として文に現象し、時に対象としての主語と併存する」という。前半部は「陰題文」の指摘である^③。つまり、情意性述語（例えば「淋しい」）においては基本的に主語「私」は不要であるが、「誰が淋しいのか」という問いがなされた時に初めて「淋しいのは私」もしくは「私が淋しい」の形で「私」が表れるというのである。後半部は、格助詞「が」（以下「ガ格」と表記する）の対象を示す格としての用法の指摘である。つまり、「母との別れが淋しい」という文において、「母との別れ」を「淋しい」心情の対象と理解し、ガ格を用いて表現するという指摘である。ガ格や対象についての検討は次章以下に譲る。

本章では、私 の 今 の感覚・心情のみを表現する情意性述語のわがこと 表現では「私／は」をいう必要がないことを確認した。

4 私 の形容詞とガ格

わがこと 表現としての情意の形容詞（私 の形容詞）は本来「主語」を必要としないが、実際の文ではガ格やヲ格（格助詞「を」）・二格（格助詞「に」）、係助詞「は」などの助詞と結び付いて用いられる。本稿

では論点を形容詞とガ格・ヲ格・二格との関係に絞って考察を加えた。

川端は形容詞を、ものの在り方（性質や事態）を主語に持ち、内面性・主観性の濃い「情意性形容詞」と、ものを主語に持ち、外面的な情態を表す「状態性形容詞」に分けた上で、情意性形容詞の主語について以下のように述べている。

からたちのとげはいたいよ／風がつけたい夜風がさむい（イ）
きのこの夜の小指がいたい／君を送りし眼のかくてむずかゆし
（ロ）

昔の傷がまだいたい／シモヤケカユイト狸ノ子（ハ）

痛覚や温度感覚のような下位感覚に意味上対応する形容詞は（中略）時に、感覚を生じさせるもの（イ）と、その生じる場所（ロ）と、場所としてのもの（ハ）の三者をそれぞれに主語とし得る。ただしここに場所とは「我」の身体に限られる。

川端は、情意性形容詞が（イ）外物や事態、（ロ）身体部位、（ハ）「場所としてのもの」などを主語に持つと指摘している。実際には、感覚の主体 私 も「私／我／おれ／ぼく」などとして主語に立ち得るから、形容詞は最終的に四種の主語をガ格で示せることになる。

ガ格はもともと連体修飾格の格助詞であり、「我・吾・己」などの表現主体や、主体と一体となって生活している「ウチ」なる人間を承ける言葉であった。大野晋の説である。大野は『万葉集』を分析し、本来なら形容詞を下接させないガ格が、接尾語サを伴って名詞化した形容詞を下接させるようになった結果、今日の「故郷が恋しい」という、ガで情緒の対象を表す表現形式を生み出したと説明している。

『万葉集』の形容詞文中において、感覚主体としての「我・吾」は使われておらず、私 に情動をもたらした人や状況はガ格で示されてい

る。『万葉集』においても情意の形容詞は わがこと 表現であり、本質的に「我」と言う必要がなかったらしい。

万葉集の時代から現代にいたるまで、わがこと 表現において格助詞が使用されないのであれば、ガ格は基本的に「空位」である。前掲の三種のガ格の在り方（イハ）は、この空位と関連があると思われる。情意主体が放棄したガ格の王座、首位の格助詞としての「主格」の地位を、形容詞と関連する様々な名詞や名詞句・名詞節が利用する余地が残されているからである。

つまり、言葉の上では、私 の痛い感覚が、身体（心のソト）にも存在すると認識されて「胸が痛い」「頭が痛い」「小指が痛い」「ここが痛い」の用法を生み（ロ）、あるいは「場所としてのもの」と認識されて「傷口が痛い」「突き指が痛い」「しもやけが痛い」の用法へと転じ（ハ）、さらには外界のコト・モノと結び付けられて解釈され、「彼の落選が痛い」「薔薇のとげが痛い」の用法にまで進む（イ）と考えられるのである。

これら四者のガ格は共起しない。ガ格の使用は基本的には一文で一度だけである。主格の助詞が複数存在すれば、句の構造が乱れ、文が壊れてしまつからである。例えば「私が指が痛い」や「私が薔薇のとげが痛い」「指が刺し傷が痛い」「私が薔薇のとげが指が痛い」などはいずれも非文であり、それぞれ「私は指が痛い」「（私には）薔薇のとげが痛い」「指の刺し傷が痛い」「私は薔薇のとげで指が痛い」となるのが普通である。このように、「痛い」の場合も一文中にガ格が二度以上使用されることはなく、組み合わせようとしても、係助詞「ハ」が代入されたり、格助詞が「ノ」「ニ」「デ」などに変更されたりして文構造に手が加わることになる。

形容詞は、連体形の活用語尾から「イ形容詞」と「ナ形容詞」とに分

類される。「イ形容詞」は従来の「形容詞」、「ナ形容詞」は所謂「形容動詞」のことである。情意性形容詞のうち、イ形容詞には「痛い」「欲しい」「きもい（気持ちが悪い）の若者言葉」などがあり、ナ形容詞には「好きだ」「大嫌いだ」「ショックだ」などがある。ナ形容詞にも前述のガ格の用法（イニ）が適用される。すなわち、「身体が楽だ」「今日は突き指が少しは楽だ」「仕事が楽だ」「私が楽だ」の用例がある。ガ格が共起しない点も同様で、「今日は、私が仕事が身体が楽だ」は成立しない。

現代の日本語の動詞文におけるガ格の存在意義は、動作や状態の主体を表す「主格」としての機能にあるが、形容詞文の場合はどうであろうか。形容詞文において複数のガ格は共起しないから、係助詞「ハ」で提示される語句や主節がない限り、ガ格に上接した語句は文を成立させるために最も重要な要件である。情意の形容詞文において、原則的に感覚主体が不在である以上、ガ格が感覚主体以外の（感覚・情意をもたらした）事物の提示に用いられても、殊更に「対象語」「目的語」と名義変更する必要はない。情意の形容詞文においても、ガ格は句や文の核となる「主」の格だからである。

5 「水が飲みたい」と「水を飲みたい」

情意性述語の文には、例えば形容詞文「水が欲しい」のほかに、動詞文「水が要る」、助動詞複合文「水が飲みたい」などの異形態がある。これらの述語文では、必要なものがガ格で示されているという共通点がある。しかし、このガ格の用法はヲ格の用法への転換の問題を孕んでいる。つまり、それぞれ「水を欲しい（と思う）」「水を要する」「水を飲みたい」と言い換えることができるのである。規範文法の立場に立つ者は

「水を飲みたい」は格助詞の誤用であるとし、英語の影響や、若者による言葉の乱用によるものと思いがちであるが、ヲ格の用法は室町時代から存し、決して英語や若者の問題ではない。「水が飲みたい」と「水を飲みたい」の問題も、情意性述語における動詞と格助詞とに関する本質的な問題である。

「〜たい」構文において、動詞がガ格を取るか、ヲ格を取るかは、基本的に動詞の性質に起因している。前章で明らかにしたように、私に感覚・心情を生じさせた外的事物は一般的にはガ格で表すのであるが、下接する動詞によってはガ格を取れないことがある。例えば(1)「貸す」「忘れる」「建て替える」などの「自分から外への放出、離脱、消去、破壊、変化を表すような動詞」、(2)「助ける」「喜ばせる」などの「人間を対象とする動詞」、(3)「電灯を(消す)」「木を(伐る)」「会社を(興す)」などの「対象物に質・量の変化をもたらす、他動性の高い動詞」、(4)「待つ」「捜す」「愛す」「願う」などの「他動性は低くても追求や感情を表す動詞」などはヲ格をとる傾向にあるという。確かに「本が貸したい」「老母が喜ばせたい」「会社が立ち上げたい」「利益が増したい」「平和が願いたい」などの文は成立しない。たとえ「〜たい」構文であっても、動詞の種類によっては、ヲ格を選択するものが存在するのである。

また、「単文や自立性の高い節の中ではガ格が多く、複文中ではヲ格が多い」、「他の格助詞(特に二格)が共起していると、ヲ格になる傾向が高い」という報告がある。もともと希望文は一文全体でひとつのメッセージを伝えるものである。希望文が複雑な構文の中に取り込まれた時に、「たい」文の構文意識が拡散し、ヲ格中心の動詞句意識が高まるのであろう。

「飲む」「は」「〜たい」の構文中ではガ格を取る動詞である。しかし、

「飲む」がヲ格をとって「水を飲みたい」となることがある。ヲ格をとる最大の理由は、動詞「飲む」が基本的にヲ格をとるという点にあるだろう。(たとえ表現されなくても)行為主体をガ格に任せ、行為の対象はヲ格で示すという文法観による拡大解釈である。

6 今の動詞とガ格

「水が飲みたい」や「水が欲しい」に近い意味を示す動詞文に「水が要る」がある。「要る」は、金田一春彦によって形容詞に近い働きを有する特殊な動詞「状態動詞」に分類されている。金田一は、アスペクトやテンスとの関係から動詞を、「状態動詞」、「継続動詞」、「瞬間動詞」、「第四種の動詞」の四つに分類した。このうち、「状態動詞」と「第四種の動詞」の中に「今や私」と深い関係が存する動詞があるので、検討を加えてみたい。

状態の不变を表す「状態動詞」は、(a)今の状態を表す、(b)無意志動詞である、(c)「〜ている」を下接させることができない、(d)「始める」「終わる」などと複合しない、(e)使役の文を作らない、(f)受け身の文を作らない、(g)可能の文を作らない、(h)命令形がない、などの特徴を持つ。

ある状態を帯びることを表す「第四種の動詞」は、(i)基本的には「〜ている」を下接させて状態動詞化させる、(a)今の状態を表す、(b)無意志動詞である、(h)命令形がない、ほかの特徴を持つ。

ともに「今」の動詞」と言える「状態動詞」「第四種の動詞」には、以下のような単語がある。金田一が指摘した単語に若干の補足を加え、さらに分類して提示する。

「状態動詞」(基本的に「ている」が付けられない)

「ある」「おる」「ござる」などの存在動詞。今のモノ・コトの存在を表す。「いる」は(条件から外れる点があるが)語義からすると、「ここに位置するものと思われる」。

「(金が)要る」「(時間を)要する」など、今の必要を表す動詞。

「できる」「読める」「(英語が)話せる」「飛べる」「切れる」などの可能の動詞。人やモノの今の潜在能力を表す。

「(鼻が)きく」「(目が)見える」「わかる」「話せる(やつ)」など、人の今の五感の状態や理解能力を表す動詞。

「(山が)見える」「聞こえる」「音/声/匂い/香りがする」など、私の感覚を通して今の外的状態を表す動詞。「ている」を付けることもある。

「思える」「思い当たる」「思い至る」「思い浮かぶ」「思いつく」「考えつく」「ぴんと来る」など発想・直感の動詞。今の私の脳の働きを表す。

「わくわくする」「すきすきする」「ときどきする」「ときめく」「むかむかする」「むかつく」など、私の今の情意・体調を表すオノマトペの動詞。「ている」を付けることもできる。

「値する」「大き過ぎる」など、私の認識・判断を通しての評価の動詞。

「第四種の動詞」(多くの場合、「ている」を付ける)

「そびえる」「沿つ」「(道が)曲がる」「丸顔をする」「しゃくれる」など、比較的客観的に今の外的状態を表す動詞。

「似る」「似合つ」「富む」「すべれる」「すばぬける」「ありふれる」など、人・モノ・コトの今の状態を私の判断を通して相対的

に表す動詞。

「ちゃっかりする」「むっすりする」「とがる」「キラキラする」「きらめく」「ざわざわする」「ざわつく」など、経験を通して、もしくは外部からでもわかる今の状態を表すオノマトペの動詞。

「第四種の動詞」は「状態形容詞」に近く、「状態動詞」

は「情意形容詞」に近い。この二種の動詞では、情意の形容詞と同様動作や状態の主体でないものに対してガ格を用いることがある。例えば、「金が要る」、「手品ができる」、「洋書が読める」、「サンスクリットがわかる」、「山が見える」、「いいアイデアが思い浮かぶ」、「胸がわくわくする」、「姿が似ている」などである。

の動詞はわがこと表現である。既述の如く、わがこと表現では私の今の感覚・心情しか表現できない。「私が胸がどきどきする」は陰題文であり、「明日、胸がどきどきする」も「あなたは胸がどきどきする」も非文である。「ときどきする」のは今の私の心臓。「胸」以外の何物でもないから、わざわざ「私が」と言う必要はない。未来の文にも使えず、他人である「あなた」を主格に立てることもできない。の動詞もわがこと表現である。「明日、思いつく」や「あなたはアイデアが思い浮かぶ」とは言えない。

「要る」の主体は「人」であり、「洋書が読める」のも「人」なのに、普通は「私が金が要る」とも「彼が洋書が読める」とも言わない。ともに係助詞を用いて「私」を提題化して「私は金が要る」「彼は洋書が読める」とすることができ、この場合はヲ格を利用して「彼が洋書を読める」と陰題文にすることもできるが、この場合の「私が金を要る」は非文である。これは「要る」という動詞と格助詞の問題である。の場合には「私には金が要る」と、二格に係助詞「ハ」を複合させるのが一般的である。二格の問題については次章で検討する。

(所有)	have time.	時間	ある。	(5)
(所有)	have a son.	息子	いる。	(6)
(欲求)	want this house.	この家	ほしい。	(7)
(欲求)	want to see this.	これ	見たい。	(8)
(理解)	I understand Chinese.	中国語	が分かる。	(9)
(必要)	need time.	時間	要る。	(10)
(知覚)	see Mt. Fuji.	富士山	見える。	(11)
(知覚)	hear a voice.	声	聞こえる。	(12)
(好き)	like this city.	この街	好きだ。	(13)
(嫌い)	hate cigarettes.	煙草	大嫌いだ。	(14)
(経験)	have seen it.	見たこと	ある。	(15)

7 場所としての「私」

英語と日本語には「逆方向の発想」があるという。金谷武洋は、英語を人間の行為・「する」が中心の言語、日本語を物事の自然な生起・存在・「ある」が中心の言語と捉え、両者の発想の相違を以下のような例文で示している。原文にない5～15の通し番号を補った。

金谷は、例文を用いて、日英の語文の相違を次のように比較分析している。

英語の例文はことごとく他動詞を使った積極的行為文(する文)である。「I」(私)は「主語」であり、さまざまな行為の動作主(「する」人間)として表現されている。日本語ではそうではない。まず、大抵の場合、「私」はそもそも登場しない。表現されたとしても、せいぜい「私は/私には」と、主語ではなく、主題(トピック)で現れるにすぎない。(中略)英語の「行為者」(主語)は日本語では「場所」(主題)となるのである。(中略)主題は行為者(役者)を表すのではなく、その場面(舞台)を表現するのである。(中略)日本語では「行為者不在」の傾向が極めて強い。ここに不在の人間が、英語においては主語、つまり行為者なのである。何と対照的な発想だろうか。

英語文において何よりも重要で、決して省略されることのない主語が、日本語文では全く表現されないことがある。「逆方向の発想」の言語的な現れの一つである。

金谷は例文を「行為者不在文」と命名したが、この不在文は二種に分けて説明するほうがよい。つまり、わがこと 表現ゆえの省略と、コンテキストに依存しての省略とに二分することができるからである。例文のうち、7・13・14の形容詞文、10・11・12の動詞文、8の複合文はわがこと 表現であって、もともと「私が」と言う必要のない文である。他人の経験の有無について「あなた/彼はそれを見たことがある」と断言することは誰にもできないから、15の経験文も わがこと 表現に準じるものと考えられる。残った5・6・9は全て「状態動詞」の文であるが わがこと 表現ではないので、「私」以外の人間を主格に立てることもできる。5・6・9の文において「私」には「が省略されているの

は、対話のコンテキストの中で殊更に言う必要がなかったからであって、その「行為者不在」の理由は わがこと 表現の場合とは全く別である。

金谷の発言の中で重要なのは、「場所としての主題」「舞台としての主題」という捉え方である。金谷が挙げた例文の主題の部分に「私」を組み込もうとすると、7「私はこの家がほしい」のように「私」を用いる8・13・14・15と、5「私には時間がある」のように「二八」を用いる6・10・11・12と、両方使える9とに三分できる。「二八」は「行為者不在文」にとつてどのような役割を果たすのであろうか。

二格がガ格よりも先に置かれる文型の重要性に着目したのは三上章である。三上は、受動態を持たない「所動詞」なる動詞が、二格（位格）を文頭に立てることが多いと指摘した。三上は「所動詞」として「ある」「見える」「要る」「できる」「飲める」などを列挙した。これらの動詞は全て、金田一のいうところの「状態動詞」である。状態動詞である所動詞にとつて、二格は、ある状態を形成・成立させる「場」である。三上自身、「誰力ニ何力ガ見工」や「誰力ニ何力ガデキ」る場合の「誰力ニ」を単に場所の副詞と見ることは許されなまいながら、「外界にある原因が主格として確立する反動で、自分自身の感情の起る舞台のように意識される」と言つ。

それにしても、時に「私には」の形で文中に立ち現れる、「今」の状態を形成・成立させる場所、「感情の起る舞台」に立つ 私 とはいったい何であるうか。

8 今 私 だけの感覚と表現

太陽を見上げた時のまぶしい感じ、チョコレートが舌の上で溶けて広がっていく時のなめらかな甘さ、チョコレートを握りしめて黒板に文字を書

いた時の感触など、それぞれの場面における非常に個人的な感覚は、数量化したり、方程式で記述したりすることが難しい。そのような微妙な感覚「クオリア」を感じ取っている 私 という存在がいる。「クオリア (qualia)」とは、もともと「質」や「状態」を表すラテン語で、一九九〇年代の半ば頃から、心の中で感じるさまざまな質感を表す言葉として定着してきた、哲学や脳科学における比較的新しい学術用語である。

まぶしさ、なめらかな甘さ、きしみ……、これらの感覚は言語化される前の原始的な感覚である。いわく言い難いクオリアを 私 は感じ、認識し、解釈し、表現し、少しずつ言語的・社会的文脈の下に置いていく。例えば、薔薇のとげが刺さって痛みを感じた 今 と、「痛っ」と叫んだ 今 は決して同時ではない。両者の時間差はほんの一瞬かもしれないが、両者の間には厳然たる時間の隔たりが存在している。二つの 今 をつないだものは何か。今 感じたことを、今 表現できるのは、過去の感覚・体験・情報を記憶しておき、想起しては言語化できる 私 だけである。

脳や肉体の中にいつしか 私 は存在し、私だけの感覚・認識・表現の場 を作り出す。場 が「脳の神経細胞」だけなのか、「内臓」や「手足」などの肉体をも含んでいるのかはわからない。いずれ 私 だけの場 の中に様々な能力・可能性・必要性が潜んでおり、外界から光や音声などの 今 の情報が入ってきて多彩なクオリアを生成する。場 は外物を認識（し、命名・分類し、その存在を記憶）し、時に感覚や情動、思考や記憶を外界に向けて発信する。私 の 今 の感覚・情意や、外界の 今 の状態は 場 を通してしか表現されない。だから、今 を表す状態動詞（三上のいう「所動詞」）や、状態形容詞に近い「第四種の動詞」を使用する時に、「人（私を含む）」を「場」と捉えて、位格「二（八）」を利用するのではないか。

「この問題、チヨ一むずい(難しい)」のような若者言葉も わがこと表現である。わがこと 表現は、話し手 私 の 今 の 感覚・情意しか表現できないから、わざわざ「今」とか「私には」とか言う必要がない。言葉の中に 私 が潜在している。

オノマトベには、「ピカピカ」「ざわざわ」「しつとり」「シーン(無音)」などの、外界の 今 の 状態を感受した 私 ならではのクオリアを表現したものと、「ヒリヒリ」「ずきずき」「しんみり」「ジーン」などの、今の 私 の 感覚(クオリアを含む)・感情を表現したものがあつた。どんなオノマトベを使うかは個人の自由であり、まったく新しいオノマトベを創出することも可能である。オノマトベは日本語の音韻や慣用的な用法によってかなり限定されているが、語彙数さえ多ければ、多彩で繊細なオノマトベの使用によって、私 の 心は豊かに適正に言語化することができる。今後も続々と作られるであろうオノマトベの独創の窓は、未来に向かつて大きく開かれている。

わがこと 表現とオノマトベは、ともに日本語を代表する個性的で魅力的な表現である。わがこと 表現が 私 の 今 の 心を直截に伝える表現であり、オノマトベが 私 ならではのクオリアや、私 の 今 の 情意を言語化するものであるならば、日本語の魅力とは、日本語が 今 私 だけの感覚や表現を何よりも重視した言葉である点にあると言えるよつ。

注

- ① 渡辺実「わがこと・ひとこと」の観点と文法論『国語学』165集、1991年6月。
② 川端善明「用言」『文法』(岩波講座日本語6)岩波書店、1976

年。

- ③ 三上章『現代語法序説』くろしお出版、1972年(復刊)(初出1953年)。
④ 注②に同じ。
⑤ 大野晋「主格助詞の成立」『文法と語彙』岩波書店、1987年(初出1977年)。
⑥ 湯沢幸吉郎「室町時代の言語研究」1929年。松村明「水を飲みたい」という言い方について『東京女子大学論集』1巻2号、1951年(『江戸東京語の研究』東京堂、1957年に転載)。
⑦ 日本語教育学会編『日本語教育事典』大修館書店、1983年。水野由美「日本語の希望文に関する一考察」(吉川守先生御退官記念)言語学論文集、淡水社、1995年。
⑧ 水野由美「希望の表現「たい」について」『中国四国教育学会 教育学研究紀要』第37巻第2部、1991年。
⑨ 金田一春彦「国語動詞の一分類」『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房、1976年(初出1950年)。同氏「日本語動詞のテンスとアスペクト」同右書(初出1955年)。
⑩ 金谷武洋『日本語文法の謎を解く』(ちくま新書)筑摩書房、2003年。
⑪ 注③に同じ。
⑫ 茂木健一郎「意識とはなにか」(ちくま新書)筑摩書房、2003年。
⑬ 茂木健一郎「心を生みだす脳のシステム」(NHKブックス)日本放送出版協会、2001年。
⑭ 中島義道「時間論」(ちくま学芸文庫)筑摩書房、2002年。
⑮ 西原克成「内蔵が生みだす心」(NHKブックス)日本放送出版協会、2002年。

(本学非常勤講師)

